



地域経営と公民協働のまちづくりを考える

第3セクター研究会九州大会報告

尾崎 正利

(よかネットNO.54 2001.11)

- 1 地域経営・第三セクター

今年6月、第3セクター研究会(会長 金田昌司教授・中央大学経済学部)の九州大会の開催に向けて、その企画と事務作業を当事務所が行うことになった。

“公民協働で儲かる地域経営”セミナーのねらい

大会のテーマは、第三セクターそのものの研究というよりも「地域経営」という拡がりにした。今、日本は巨大な財政赤字を抱え、雇用不安が懸念されているが、地域社会全体から見ても、第三セクターというよりは、地域でどんな産業を興し、どのように雇用を確保し、どんな楽しみを作っていくかという「地域全体の将来像」に関心が向かっていると考えられたからである。

そして事例を聞きながら一緒に考えるセミナー形式の集まりとした。

九州各地から総勢70名の参加

10月5日の大会当日、会場である博多区の三鷹ホールには総勢70名以上が参加した。参加者は自治体職員、大学の研究者、第三セクターの支配人、NPOの職員などで、福岡県下を中心に九州各地からの参加があり、宮崎県椎葉村や長崎県五島の小値賀町などからの参加もみられた。

この日に向けた参加呼びかけも、大学の研究者だけではなく、地域づくりに関わっている人に幅広く呼びかける、県下の市町村からも参加して欲しいため(財)福岡県市町村研究所から呼びかけていただく、ということ当初から決めておいた。

さまざまな現場から、地域の豊かさづくりの実践報告講師をお願いしたのは次の6人の方々である。

一番目は広松伝氏。昭和52~60年の間、柳川市で荒れた堀割を、市民と行政が協働作業で再生に取り組み、クリークのまちとして注目を集めるとともに、川下りをはじめ観光業での雇用を大きく伸ばしたあゆみについて(「よかネット」3号(1993.9)、本誌46頁、平成4年度NIRA研究レポートで紹介)。

二番目は池永千年氏。日田大鶴農協で一点突破型

農業を通して、山間地の高齢者ばかりの地域でも成り立つ農業を築いたあゆみについて(「よかネット」53号(2001.9)で紹介)。

三番目は今村巧児氏。太宰府市で店舗撤退後の建物を壊さず、残存価値を生かしリニューアルする方法で駅前の賑わいを維持したとりくみ(「よかネット」48号(2000.11)で紹介)。

四番目は杉谷岩彌氏。地域に密着した医療・福祉の営業活動と無理のない少しずつの開発で、地域に喜ばれて、200名以上の雇用を創出したとりくみについて(「よかネット」34号(1998.7)で紹介)。

五番目は加留部貴之氏。NPOサポート事業を行うNPOの活動を通して、公民協働の見通しについて。

六番目は世利洋介氏。今回の学会開催にあたって後援していただいた(財)福岡県市町村研究所の顧問として、これからの自治体と地域の協働について。

各講師の持ち時間は一人30~40分で、それぞれ各地の取り組みについて報告が行われた。ここでは、誌面の関係上全ての紹介はできないが、それぞれの報告から印象的な話をとりまとめた。

【広松伝氏】

・堀割浄化の作業をはじめ前、すでに昭和52年春には、市内部のプロジェクト会議により埋め立て計画まで決まっていた。「今までの城堀浄化は行政が金を出しても、すぐに元のもくあみだ」、「柳川市の城堀は農業用水であり観光の資源だと思うが、埋まって使えない城堀は整理した方がいい」、「周辺の町も汚れた堀を埋めて有効利用している」という意見は多かった。

・しかし、埋めることは柳川の長い水との付き合いを全て断絶することになる。文化・暮らし・生態系のあらゆる面でそれは避けるべきであった。うまくいかなかった理由は、行政と住民が一元化せずバラバラに取り組んだためである。「行政と住民が一体で取り組むべき」という広松さんの意見

(当時、環境課の埋立て担当係長)を市長がくんでくれた。昭和53年、埋め立て計画は6ヶ月凍結され、河川浄化計画の作成が決まった。

- ・実働にあたって住民の参加を呼び込むため、「城堀のうち観光に使っているところ優先で始めるのではないか」という市民の疑問を払拭し、浄化活動が地域全体のために行うという市の姿勢を示すため、あえて観光スポットではなく、堀が埋まってわずかな雨でも溢すような場所を優先的に整備した。
- ・懇談会ですぐ一致団結とはいかなかったが、町内の堀や川を見て回る現地見学会を始めて、違法建築物や埋め立てなど、問題点さがしを行うフィールドワークを通じた意識形成が効果的だった。具体的に違法建築物を撤去するよう地元で取り組み、機械が入らない狭い場所は人手によるなど、人海戦術での活動が地区ごとに進められた。56ヶ所あった不法建築物は着手までに50ヶ所が撤去され、城堀が開かれていった。
- ・柳川の観光の目玉はこのようにして形成され、多大な雇用・所得を生み続けている。

【池永千年氏】

- ・はじめ大鶴農協に行った頃は、農家は高齢化が進んで「嘆き節」ばかりだったし、農協も種や肥料の納期が遅れるなど、組合員との信頼関係はなかった。農協も僅か5軒の畜産農家(乳牛・肉牛・採卵鶏)で販売額の8割を占め、残りの農家は山間部の3反農家ばかりだった。
- ・やる気のある10人のお年寄りを見つけた。何よりも「流した汗に報いる」成果こそが全てと考え、作ることに同じくらい、売り先の市況や地域の人々の嗜好など情報を的確に掴むことを重視した。
- ・大鶴農協では、少量ながら需要が確実にあるもの(バーやホテル、料亭などで使われる食材など)を中心に作り、市場で値崩れしないよう心掛けて、全国35市場に年間70~80品目を送り込んでいる。



報告に聞き入る参加者

- ・高齢者ばかりの地域といっても日本中にある。生きがいくりと経済活動が結びついて、勢いにつながるには適人適作と総員が参加できるような、自立意識を地域で持っていくことが何よりも大事だ。大鶴地域では最初10人の取り組みからスタートして、3年目でゲートボールが消えた。自分で頑張っで自分で成果を得た人が、村の中で仲間を増やしたことが、地域全体で自立意識が芽生えたきっかけになった。

【今村巧児氏】

- ・西鉄五条駅はベッドタウンの最寄り駅であるため、駅前の地域最大手の商業施設が閉店したとき、夜の帰り道を照らす照明は消えて薄暗く、誰も管理しない建物は、少年非行の温床になりかかっていたこともあった。
- ・裁判所から競売で取得した当初は、建物を壊して使おうという考えもあった。しかし、建物の解体費用だけで3億かかるということと、残存価値が15年あるということで、残してリニューアルする方向を決めた。
- ・阪神大震災でビル倒壊が続出したため、耐震構造の基準が大幅に変わり、建物取得後、新しく壁を抜いて外に面した窓を開けたため、代わり補強材が必要になり、結局13億円の補修工事費を要した。
- ・それでも2階部分が文化交流・情報発信スペースで平日は夜まで、休日も終日、人が活動するようになり、1階が生鮮品中心のスーパーで明るい雰囲気のお店になっているため、閉店前の店舗よりも人が増えたという意見も、多く寄せられている。

【杉谷岩彌氏】

- ・片田舎で診療所を開いたとき、開発と建設と資金は建設業者、医療サービスは辛島先生(お医者さん)、客引きは杉谷さん、という3者の役回りを

もった。

- ・患者の多くは、医者 앞에서、緊張して「どこが痛い」さえ忘れてしまう。診療所をもっと身近に感じてもらえるよう、地域の集落を杉谷さんと辛島先生と一緒に回って、集落の家で「健康講話会」を週に何回か行った。家であれば地域の人も医者 앞에서緊張しない。講話会に村人が10人集まると、その中の2～3人は必ず何か具合の悪いところが見つかった。そうした人は必ず診療所に来てくれる。杉谷さんは徐々に活動を広げた。
- ・こうした活動を通じて、診療所の営業活動という側面だけでなく、地域の老年寄りの交通や移動の不便さをいかに解消できるか、という生活の安心をサポートするサービスへとつながった。患者を自宅まで送迎するバスは、医者と患者の医療行為を通じた従属関係であるとして、当時、認められていなかった移送サービスを陸運支局に運動して認められた。これは全国各地で病院などが行う移送サービスのはしりになった。
- ・今はニコニコ生活村の名誉村長。現在は生まれた北九州市の小倉南区郊外でホームヘルプサービスの事業を立ち上げている。介護保険サービスのメニューと料金が一目見て分かるようなイラスト解説を加えた「目で見る介護保険」を作成している（無断転載自由と書かれている）。

【加留部貴之氏】

- ・地域の中で、行政でリードできない分野のサービスが、重要になっている。例えば、村おこしで地域の人々を導き、勇気づけ、経験と実例をもって示していく役目は誰にでもできることではない。
- ・これから先の社会では、個人の想いを発揮できる環境づくりが重要になる。NPOの役割もそうした活動を発揮できる受け皿としての役割ではないか。

【世利洋介氏】

- ・県下の広域圏の中には、NPOやボランティアが

行政組織と協力して有効に機能していくために、地域がどのような環境をつくっていくべきか検討を行っているところもある。

- ・市町村合併の推進により自治体の一般財源が削減されるということがいわれているが、その中で地域の住民と公共がともに関わっていく機会をいかに作るかが問われている。

会場からは地域事情に即した質問が出された。

今回のセミナーでは、テーマである“地域経営”について、参加者との意見交換を行いたいと考えていたため、講師の報告のあと、出席者の質疑を交えた討論会を1時間もつことにした。

6人の講師の報告は、いずれも地域事情に即した取り組みであったが、手を挙げて質問していた参加者も様々な地域事情に即したものだっように思える。

以下、出された意見や質問をいくつか挙げてみる。

- ・「地域に観光客がきて産業として何か生かそうと考える場合、地域にどんな経済的効果が生まれてくるか、ということ在地元の人に分かりやすく伝えて、みんなで考えるようなことはできないか」
- ・「中山間地のできる農業のあり方として、とても参考になった。市場に細分化して出荷する場合、どういう点を重視したらよいか」
- ・「市町村合併が進んだ場合、離島が生き残る道筋としてどのようなことができるか、地域で豊かになる方法をもっと知りたい」
- ・「NPO法人を設立しているが、今後社会的にどのように存在意義を示していくべきか模索中である」
- ・「街中で、空いた施設をあえて壊さないという決断も、重要だということが分かった」
- ・「医療や保健で、営業活動を含めたマネジメントは大事だ。しかし、田舎で医療活動を行う場合、どういう点を重視したらよいか」など。

今回の学会は、学会といってもあまりカワイイ雰囲気

気にならなかったのは、講師の方々のお話がどれも的を得たものだったからだと思う。参加者に反応をきくと「ふつう学会といえば、難しい話に居眠りが定番だが、今日のは楽しく聞けた」とか「参考になった」といったプラス評価のご意見を多くいただいた。

またテーマであった“地域経営”については、今回出された質問や意見をもとに、何か具体的な取り組みに転じていきたい。